

五先生の御退職に際して

(団塊最後の年とされている) 1949年に生まれた村上春樹による「ノルウェーの森」の主人公は、「衣食足りた時代におけるラディカリズム」というものに馴染めず、学生運動に入り込めなかった(村上自身を含む)世代を代表している。今年3月末で定年退職される5先生方は1950年生まれでまさにこの世代に属していたのではなかろうか。とはいえ世界的広がりを見せた1968年前後のベトナム戦争反対運動を高校生として実感しており、十分にリベラルな考えに接してきた世代でもある。

このように書くと、何か遠い昔話をしているようで、歳月の流れを感じるだけでなく、時代の思想や社会風潮の変化には驚くばかりである。しかし当時と現在をやや強引に結びつけるとすると「国際化」というキーワードが浮かび上がってくる。1970年は大阪で万国博覧会が開催された年で、世界の万物が集まった、まさにそれは戦後日本の国際化を代表する出来事であった。

とはいえ今から振り返ると、それは大方、モノの国際化を意味していたのではなかろうか。この年に先んじて繊維製品を巡り日米貿易摩擦は始まっていたし、自動車、弱電製品の輸出に代表される大幅な貿易黒字が定着するのは数年後のことであった。

1990年代に一般的となるインターネットや、近年始まったSNSは、言葉(しばしば英語)を通じて文字通り世界中の人と人を結びつけるヒト(の交流)の国際化を推進してきている。この変化を産業論的に述べるなら製造業からサービスの国際化への力点の移動ということになるだろう。しかしながら実は、インターネット等に先んじて、文字通り世界中の人と人を直接結びつけることに大きく貢献してきたのは、ジャンボジェットが推し進めた海外旅行の大衆化である。何を隠そうジャンボ機が日本に就航したのは1970年である。

実はこうした歴史的な文脈の中で、石原直紀先生はコロンビア大学に留学し国連職員となられた。カンボジア和平への貢献は先生の業績の重要な一角をなしている。三宅正隆先生はカリフォルニア大学サンタクルーズ校で学び、英語教員としての現在の礎を築かれた。余談ではあるが国際結婚もされた。桂良太郎先生もカナダ留学が現在の彼の基盤の一つとなっていることは確かである。岡田滋行先生は読売新聞英字新聞部長として、まさに情報あるいはヒトの国際化推進の最前線に立つこととなった。文京洙先生はその出自からも日本と朝鮮半島、日本とアジアということを常に意識した研究者人生を送るとともに、日本社会がマイノリティにより平等で寛容であるよう働きかけを続けてこられた。つまり5先生たちの世代は、十分に国際化を意識していた世代であり、とりわけ5先生は国際化を自分の人生に大きく取り込み、社会に貢献し

ようとした人たちの代表であった。

国際関係学部の国際化というと、その30年近くの歴史の中でも、やはりグローバル30の成果としてのグローバルスタディ（GS）専攻の創設が最大かつ画期的偉業ということになる。国際関係学部は1988年に、当初は衣笠キャンパスから少し離れた金閣寺近くの西園寺記念館（現衣笠セミナーハウス）に創設された。日本全体においても、とりわけ関西においては類する学部がない時代にスタートしたという先進性が、優秀な日本人学生を集める結果となり、衣笠から適度に独立し小規模学部であったことが、教職員・学生間に、家庭的とすらいえる和やかなコミュニティを形成することに役立った。今にして思えば、学生並びに教員間の均質性が比較的高く、古き良き牧歌的な時代が、学部の穏やか気風を培った。先生方個人の人格という側面もあるが、在籍年数が20年を越える三宅、文両先生においては、行政や教育に臨むその物腰に明らかに当時の柔らかなやさしさを今も保持されているように感じる。

確かにGSの誕生は、国際関係学部の国際化に質的・構造的転換をもたらしたが、それ以前にも国際化推進の模索がもちろん存在した。アメリカン大学とのDUDPやUBCジョイントプログラムに、国際関係学部は例年他学部に比して最も多くの学生を派遣してきたが、その背景には学部の英語教育があり、その中心を担った一人が三宅先生であった。英語圏に留まらず初修語圏に多くの交換留学生を輩出しているのも我が学部の特徴であるが、韓国の諸大学への派遣並びに受け入れに貢献してきたのが文先生であった。国際関係学部教員がその中心を担ったという意味では、GSの前身ともいえる、学部横断プログラム国際インスティテュートは、専門に繋がる英語教育や、英語による専門教育、多彩な長短期の留学プログラムを開発した。国際インスティテュート採用の教員として立命館での歩みを始められ石原、桂両先生は同インスティテュートを通じて全学の国際化に貢献された。石原先生の学部内外での国連関連プログラムに対する情熱は今も継続しているし、東南アジアを中心に弱者やマイノリティの立場を中心に国際関係を論じてこられたのが桂先生であった。

岡田先生は何年にもわたり、学部上回生対象のゼミナール大会を運営され、学部と社会との接点をより太いものとすることに貢献されてきた。加えていうまでもなく、マスコミ志望の多くの学生にその道筋を示されてきたことも先生の大きな功績であった。岡田先生はまた、演習授業終了後も学生たちと食事をしながら語らうことを何よりも楽しまれたと聞いている。学生に対する愛情に関して誰にも負けないと自負されているのは桂先生も同様である。自らの研究室を学生たちに常時開放されていたという逸話はあまりにも有名である。

前述の、英語による学びで学位が取得できる文部科学省G30事業は2007年に開始され、2011年にGSが始まった。そして国際部長として全学のG30に関する議論の中心にいたのが石原先生であった。また文先生が学部長であった時にGSは完成年度を迎え、先生を中心とする学部執行部は、パイオニア的なプログラムにつきものの多くの問題点を補正するとともに、

更なる改革の議論を推し進めた。

最後に、限られた紙数と私の能力不足から、それぞれに個性的な5先生のご業績、とりわけ研究に関しては、まったく不十分にしかご紹介できなかったことをお詫び申し上げたい。

いずれにせよ、人のグローバル化の進展の中、不可避ともなったGS創設がもたらした混沌を、多様性ゆえの強みに変えていく厳しい努力はこれからも続いて行く。グローバル化に対応できる人材を育成することが国際関係学部の使命である以上、その役割から逃げ出すことは出来ない。ますます5先生からのアドバイスが必要となりそうである。

2016年3月

国際関係研究科長 中達 啓示

